

# 眠りの精

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫



世界じゆうで、眠りの精のオーレ・ルゲイエぐらい、お話をたくさん知っている人はありません！——オーレ・ルゲイエは、ほんとうに、いくらでもお話ができるのですからね。

夜になって、子供たちがまだお行儀ぎようぎよくテーブルにむかつていたり、低い椅子いすに腰こしかけたりしているころ、オーレ・ルゲイエがやってきます。オーレ・ルゲイエは、静かに静かに階段を上ってきます。なぜって、靴くつした下しかはいていないのですからね。オーレ・ルゲイエは、そつとドアをあけて、子供たちの目の中に、シユツと、あまいミルクをつぎこみます。でも、ほんの、ほんのちよつぴりですよ。けれど、それだけでも、子供たちは、もう目

をあけてはいられなくなるのです。ですから、子供たちには、オーレ・ルゲイエの姿が見えませぬ。

オーレ・ルゲイエは、子供たちのうしろにしのびよつて、首のところをそつと吹ふきます。すると、子供たちの頭が、だんだん重くなつてきます。ほんとですよ。でも、べつに害をくわえたわけではありませぬ。だつて、オーレ・ルゲイエは、子供たちが大好きなんですから。ただ、子供たちに静かにしてもらいたい、と思つているだけなのです。それには、子供たちを寢床ねどこへ連れていくのがいちばんいいのです。オーレ・ルゲイエは、これからお話を聞かせようと思つているので、子供たちに静かにしていてもらいたいです。――

さて、子供たちが眠ってしまおうと、オーレ・ルゲイエは寢床の上ですわります。見れば、たいへんりっぱな身なりをしています。上着は絹でできています。でも、それがどんな色かは、お話しすることができません。というのも、オーレ・ルゲイエがからだを動かすと、それにつれて、緑にも、赤にも、青にも、キラキラ光るのですから。両腕りょううでには、こうもりがさを一本ずつ、かかえています。一本のかさには、絵がかいてあります。それをよい子供たちの上にひろげると、その子供たちは、一晩じゆう、それはそれは楽しいお話を夢ゆめに見るのです。もう一本のかさには、なんにもかいてありません。これをお行儀のわるい子供たちの上にひろげると、その子供たちは、ばかみたいに眠りこんでしまって、あ

くる朝目がさめても、なんにも夢を見ていないのです。

ではこれから、オーレ・ルゲイエがヤルマールという小さな男の子のところへ、一週間じゆう毎晩、出かけて行って、どんなお話をして聞かせたか、わたしたちもそれを聞くことにしましょう。お話はみんなで七つあります。一週間は、七日ですからね。

## 月曜日

「さあ、お聞き」オーレ・ルゲイエは、晩になると、ヤルマールを寢床へ連れて行って、こう言いました。「今夜は、きれいにかざろうね」

そうすると、植木ばちの中の、花という花が、みんな大きな木になりました。そして、長い枝えだを、天てんじよう井の下や、かべの上のぼしました。ですから、部屋全体へやが、たとえようもないほど美しい、あずまやのようになりました。どの枝にもどの枝にも、花がいっぱい咲さいています。しかも、その花の一つ一つが、バラの花よりもきれいで、たいそうよいにおいをはなっているのです。おまけに、それを食べれば、ジャムよりも甘あまいのです。実は、金のようにキラキラ光っています。そればかりか、ほしブドウではちきれそうな菓子パンまでも、ぶらさがっているのです。ほんとうに、なんてすばらしいのでしょうか！

ところがそのとき、ヤルマールの教科書のはいつている机の引

出しの中で、なにかがはげしく泣きだしました。

「おや、なんだろう？」と、オーレ・ルゲイエは言いながら、机のところへ行って、引出しをあけてみました。すると、石盤せきばんの上で、なにやらさかんに、押し合いへし合いしているではありませんか。それは、こういうわけです。算数の計算のときにまちがった数が、いつのまにか、そこへはいりこんできたため、それを押し出おそうとして、数たちが、今にも散らばろうとしているところだったのです。石筆が、ひもにゆわえられたまま、まるで小い又のように、とんだりはねたりしていました。石筆は、なんとかして計算を助けようとしていたのですが、ちつともうまくいきません。――

と、今度は、ヤルマールの習字帳の中から、とても聞いては  
られないほど、泣きわめく声が聞えてきました。そこで習字帳を  
あけてみると、どのページにも、全部の大文字が、縦に一列にな  
らんでいました。その大文字のとなりには、小文字が一つずつ、  
ならんでいました。これはお手本の字です。けれども、またその  
そばに、二つ三つ字が書いてありました。これらの字は、自分で  
は、お手本の字に似ているつもりでいました。なにしろ、ヤルマ  
ールがお手本の字を見て書いたものだったのですから。ところが、  
これらの字は、鉛筆<sup>えんぴつ</sup>で引いた線の上に立っていないければいけな  
いのに、ころんだように、横だおれになっていました。

「ほら、いいかい。こんなふうに、からだを起すんだよ」と、お

手本の字が言いました。「ほうら。こんなふうには、いくぶんななめにして、それから、ぐうんとはねるんだぜ」

「ぼくたちだって、そうしたいんだよ」と、ヤルマールの書いた字が言いました。「だけど、できないのさ。ぼくたち、気分がわるいんだもの」

「じゃ、おまえたちは、げざいを飲まなきゃいけないね」と、オーレ・ルゲイエが言いました。

「いやだよ、いやだよ！」と、みんなはさけぶといつしよに、さつと起き上がりました。そのありさまは、見ていておかしいほどでした。

「今夜は、お話はしてあげられないよ」と、オーレ・ルゲイエは

言いました。「これから、訓練をしなければならんだよ！  
一、二！ 一、二！」それから、みんなは訓練をうけました。そ  
うすると、お手本の字のように、元気よく、まっすぐに立ちまし  
た。けれども、オーレ・ルゲイエが行ってしまつて、つぎの朝、  
ヤルマールが目をさましたときには、みんなは、やっぱりきのう  
と同じように、なさけないかつこうをしていました。

## 火曜日

ヤルマールが寢床にはいったとたん、オーレ・ルゲイエは、小  
さな魔法まほうの注射器で、部屋の中の、ありとあらゆる家具にさわ

はじめました。すると、さわられた家具は、つぎつぎとしゃべりだしました。しかも、みんながみんな、自分のことばかりしゃべりたてました。なかにただひとり、痰壺たんつぼだけは、だまりこくつて立っていました。けれども、心の中では、みんながあんまりうぬぼれが強く、自分のことばかりを考え、自分のことばかりをじまんしていて、おとなしくすみっこに立って、つばをはきかけられて、いるものことなどは、ちつとも考えてくれないのを、ふんがいしていました。

たんすの上には、一枚の大きな絵が、金ぶちの額がくに入れられてかかっていました。その絵は風景画でした。大きな年とつた木々や、草原に咲いている花や、大きな湖が、かいてありました。湖

からは、ひとすじの川が流れでて、森のうしろをめぐり、たくさんのお城のそばを通って、遠く的大海にそそいでいました。

オーレ・ルゲイエは、魔法の注射器でその絵にさわりました。と、たちまち、絵の中の鳥は、歌をうたいはじめ、木々の枝は風にそよぎ、雲は空を流れてゆきました。そして、雲の影が、野原の上にうつつてゆくのをさえ、見えました。

さて、オーレ・ルゲイエは、小さなヤルマールを、額ぶちのところで持ちあげてやりました。そこで、ヤルマールは、絵の中の深い草の中に足をふみいれて、そこに立ちました。お日さまが、木々の枝のあいだからヤルマールの頭の上にさしてきました。ヤルマールは湖のほうへかけて行って、ちょうどそこにあつた、小

さなボートに乗りました。ボートは、赤と白とにぬってありまして。帆ほは、銀のように、キラキラ光っていました。ボートは、六羽わのハクチョウに引かれていきました。ハクチョウたちは、みんな首のところに黄金の輪をつけ、頭にはきらめく青い星をいただいています。ボートが緑の森のそばを通ると、森の木々は、盗とうぞくく賊まじよや魔女の話をしてくれました。森の花は、かわいらしい、小さな妖ようせい精せいのことや、チョウから聞いた話をしてくれました。

見るも美しいさかなが、金や銀のうろこをきらめかせながら、ボートのうしろからおよいできました。ときどき、水の上にはね上がっては、ピチャツ、ピチャツと、音をたてました。赤い鳥や青い鳥が、大きいのも小さいのも、長く二列にならんで、ボート

のあとから飛んできました。ブヨはダンスをし、コガネムシはぶんぶん歌をうたいました。そして、みんながみんな、ヤルマールのあとについてこようとしました。しかも、みんな、めいめい一つずつのお話を持っててです！

なんとというすばらしい船あそびではありませんか！ やがて、

森が深くなつて、うす暗くなりました。と、思うまもなく、すぐ

また、お日さまのキラキラ照っている、世にも美しい花園はなぞのに出

ました。花園には、ガラスと大理石でできた、大きな御殿ごてんが、い

くつも立っていました。そして、御殿の露バルコニー台には、お姫さまひめ

たちが立っていました。しかし、どのお姫さまも、ヤルマールが

前にあそんだことのある、よく知っている、小さな女の子たちば

かりでした。みんなは、手をさし出しました。見れば、菓子屋かしやのおばさんのところでもめつたに売っていないような、すてきなおいしい、小ブタのさとう菓子を持っていました。ヤルマールは通りすぎるときに、その小ブタのさとう菓子のはしをつかみました。けれども、お姫さまがそれをしつかりとにぎっていたので、さとう菓子は二つに割れてしまいました。そして、お姫さまの手には小さいほうが残り、ヤルマールの手には大きいほうが残りました。どの御殿の前にも、小さな王子が番兵に立っていました。みんな、金のサーベルで敬礼しながら、ほしブドウと、すずの兵隊さんを、雨のように降らせてくれました。だからこそ、ほんとの王子というものです！

まもなく、ヤルマールのボートは森の中をぬけました。それから大きな広間のようなところを通ったり、町の中を通りすぎたりしました。そのうちに、ヤルマールがごく小さかったころ、おもりをして、たいそうかわいがってくれた、子もり娘の住んで<sup>むすめ</sup>いる町へ、やってきました。娘はうなずいて手をふりながら、かわいらしい歌をうたいました。その歌は、まえに自分で作って、ヤルマールに送ってくれたものでした。

いとしいわたしのヤルマール、

思うはあなたのことばかり！

かわいい唇、<sup>くちびる</sup>赤い頬、<sup>ほお</sup>

キスしたことも、忘れぬ。

あなたのさいしよのかたことを

耳にしたのは、このわたし。

だのに、いまは会えないの。

わたしの天使のしあわせを

ひとりわたしは祈いのりましょう！

すると、鳥も、みんないつしよにうたいだしました。花はくきの上でダンスをし、年とった木々はうなずきました。まるで、オレ・ルゲイエのお話を、みんなが聞いているようでした。

## 水曜日

まあまあ、外は、なんというひどい雨でしょう！ 眠ねむっていて  
も、ヤルマールには雨の音がよく聞えました。オーレ・ルゲイエ  
が窓をあけると、水が窓わくのところまで届いていました。外に  
は、大きな湖ができています。ところが、りっぱな船が一そう、  
家の前にきていました。

「ヤルマールや！ 船に乗って、旅に出かけよう」と、オーレ・  
ルゲイエは言いました。「今夜のうちに、よその国へ行つて、あ  
したの朝は、ここへもどつてこられるからね」

そこで、ヤルマールは、さつそく晴着を着て、そのりっぱな船



らずつと離れてしまひました。そして、とうとうしまいには、つばさをひろげたまま、下へ下へと落ちていきました。二度、三度、つばさをバタバタやりましたが、もう、どうしようもありません。足が、船の帆綱ほつなにさわりました。帆の上をすべり落ちて、バタツと、甲板かんばんの上に落ちました。

船のボーイがこのコウノトリをつかまえて、ニワトリや、アヒルや、シチメンチョウのはいつている、トリ小屋の中に入れました。あわれなコウノトリは、しょんぼりして、みんなの中に立っていました。

「みなさん、ごらんなさいな！」と、メンドリたちが、いつせいに言いました。

すると、シチメンチョウは、思いきり、ぷうつとふくらんで、おまえはだれだい、とたずねました。アヒルたちはあどずさりして、たがいに押しあいながら、「早く言いな。早く言いな」と、ガアガアさわぎたてました。

そこで、コウノトリは、暖かいアフリカのこと、ピラミッドのこと、砂漠さばくを野ウマのように走るダチョウのこと、などを話しました。しかし、アヒルたちには、コウノトリの言うことがわかりません。それで、たがいに押しあいながら、言いました。「どうだい、みんな、こいつばかだと思うだろう！」

「うん、たしかに、こいつはばかだよ！」シチメンチョウはこう言つて、のどをコロコロ鳴らしました。コウノトリは何も言わず

に、ただアフリカのことばかりを心に思っていました。

「おまえさんは、きれいな細い足をしているね」と、シチメンチヨウは言いました。「五十センチでいくらするんだい？」

すると、アヒルたちは、「ガア、ガア、ガア！」と、ばかにしたように、笑いました。けれども、コウノトリは、なんにも聞えないような顔をしていました。

「いつしよに笑ったらどうだい」と、シチメンチヨウは言いました。「ずいぶん、しゃれたつもりなんだからな。それとも、おまえさんには低級すぎたかい。おや、おや！ こいつはちつと足りないや！ おれたちは、おれたちだけで、ゆかいにやろうぜ！」  
こう言つて、クツ、クツと鳴きました。すると、アヒルたちは、

「ガア、ガア、ガア！」とさわぎたてました。こうして、みんながおもしろがっているありさまは、おそろしいほどでした。

けれども、ヤルマールはトリ小屋へ行つて、戸をあけて、コウノトリを呼びました。コウノトリは、ヤルマールのあとから甲板にとび出てきました。いまでは、からだも、じゅうぶんに休まりました。コウノトリは、ヤルマールにお礼を言いたそうに、うなずいているみたいでした。それから、つばさをひろげて、暖かい国へむかつて飛んでいきました。ニワトリたちはクツ、クツと鳴き、アヒルたちはガアガアおしやべりをし、シチメンチョウは顔をまっかにかしました。

「あした、おまえたちをスープにしてやるぞ」と、ヤルマールは

言いました。けれども、やがて目がさめたときには、いつもの小さな寝床ねどこの中に寝ていました。それにしても、オーレ・ルゲイエが、ゆうべさせてくれた旅は、ほんとうにふしぎな旅でした！

## 木曜日

「いいかね」と、オーレ・ルゲイエは言いました。「こわがっちやいけないよ。ごらん。ここに、小さなハツカネズミがいるね」  
こう言いながら、かわいい、ちっちゃなハツカネズミを持った手を、ヤルマールのほうへ差しだしました。「このハツカネズミは、おまえを結婚けっこん式しきに招待しにきたんだよ。ここで、二ひきのハツ

カネズミが、今夜、結婚することになったのさ。そのふたりは、おまえのおかあさんの食物部屋の床ゆかした下に住んでいるんだよ。あそこは、とても住みごこちのいいところなんだって！」

「でもね、ちっちゃなネズミの穴から、どうして床下へはいつていけるの？」と、ヤルマールは聞きました。

「わたしにまかせておけば、大丈夫！」と、オーレ・ルゲイエだいじょうぶ

は言いました。「いま、おまえを小さくしてあげるよ」それから、オーレ・ルゲイエが、あの魔法まほうの注射器でヤルマールのからだにさわると、ヤルマールのからだは、たちまち、どんどん小さくなって、とうとう、指ぐらいの大きさになってしまいました。「もう、すずの兵隊さんの服が、かりられるよ。きつと、似合うだろ

う！ 宴会えんかいのときは、軍服を着ていたほうが、スマートに見えるからね」

「うん、そうだね」と、ヤルマールが言ったとたん、もう、このうえなくかわいらしいすずの兵隊さんのように、ちゃんと軍服を着ていました。

「どうか、おかあさまの指ぬきの中に、おすわりくださいませ」と、小さなハツカネズミが言いました。「そうすれば、あたくしが引っぱってまいりますから」

「おや、お嬢じょうさんに、そんなお骨折りをしていただいては、申しわけありません」と、ヤルマールは言いました。こうして、みんなは、ハツカネズミの結婚式へ出かけていきました。

はじめに、みんなは、床下の長い廊下ろうかにはいりました。そこは、指ぬきに乗って、やっと通れるくらいの高さでした。くさった木の切れはしのあかりが置いてあるので、廊下じゅうが明るくなっていました。

「ここは、いいにおいが、しやしません？」と、ヤルマールを引っばっているハツカネズミが言いました。「廊下じゅうに、ベークソンの皮がしいてあるんですよ。こんなにすてきなことってありませんわ！」

まもなく、みんなは式場へ来ました。右側には、小さなハツカネズミの婦人たちが、ひとりのこらず立っていて、ひそひそ声で話しては、ふざけあっていました。左側にはハツカネズミの紳士しんし

たちが立ちならんでいて、前足でひげをなでていました。部屋のまんなかには、花嫁はなよめ、花婿はなむこの姿が見えました。ふたりは、中身をくりぬいたチーズの皮の中に立っていて、みんなの見ている前で、何度も何度もキスをしていました。むりありません。ふたりはもう婚約しているのですし、それに、いまにも結婚式をあげようというのですからね。

それから、お客さまが、ますますふえてきました。とうとうしまいには、おたがいが、もうすこしで、踏ふみ殺されそうなくらいになりました。そのうえ、花嫁と花婿が戸口に立っていたものですから、だれひとり出ることも、はいることもできません。部屋の中にも、廊下と同じように、ベーコンの皮がしきつめてありま

した。これが、ご馳走ちそうの全部だったのです。デザートには、エンドウマメが一つぶでました。このエンドウマメには、家族の中のひとりが、花嫁と花婿の名前を歯でかみつけておきました。といつても、頭文字かしらもじだけです。こんなところは、ふつうの結婚式とは、まったくかわっていました。

ハツカネズミたちは、口々に、りっぱな結婚式だった、それに、話もなかなかおもしろかった、と言いました。

そこで、ヤルマールも家へ帰りました。こうして、ほんとうにじょうひんな宴会に行ってきたのです。ただ、からだをちぢこめて、小さくなつて、すずの兵隊さんの軍服を着ていかなければなりませんでしたが。

## 金曜日

「ちよつと信じられないことだが、おとなの中にも、わたしにそばにいてもらいたい人が、大ぜいいるんだよ」と、オーレ・ルゲイエが言いました。「わけても、なにかわるいことをした人が、そうなんだよ。『やさしい、小さなオーレさん』と、その人たちは、わたしに言う。『ああ、どうしても眠ねむれません。一晩じゆう、こうして横になつていると、今までにやったわるい行いが、みんな目に見えてくるんですよ。ちつぽけな、みにくい魔物まものの姿になつて、寝床ねどこのはしにすわり、熱い湯をおれたちにひっかけるんで

す。どうか、きて、そいつらを追っばらってください。ぐっすり寝られるように！」こう言つて、深いため息をつくんだよ。そしてまた、『お礼はよろこんでしますとも。それじゃ、おやすみなさい、オーレさん！ お金は窓のところにありますよ』と、言うのさ。でも、わたしは、お金がほしくて、そんなことをするんじゃないんだよ」と、オーレ・ルゲイエは言いました。

「今夜は、どんなことをするの？」と、ヤルマールはききました。「そう、どうだね、今夜も、もう一度、結婚式へ行く気があるかい？　きのうのとは、もちろんちがうけどね。おまえのねえさんは、ヘルマンという、男のような顔をした大きな人形を持っているだろう。あれがベルタという人形と結婚することになっている

んだよ。それに、きょうは、この人形の誕生日たんじょうびだしするから、贈り物おくものも、きつと、うんとたくさんくるよ」

「うん、それなら、ぼくもよく知ってるよ」と、ヤルマールは言いました。「人形たちに新しい着物があるようになるよ、いつもねえさんは、誕生日のお祝いか、結婚式をやらせるんだよ。きつと、もう百回ぐらいになるよ」

「そうだよ。今夜が、百一回めの結婚式なんだよ。でも、この百一回がすめば、それで、みんな、おわってしまふのさ。だから、今夜のは、とくべつすばらしいだろうよ。まあ、見てごらん」

そう言われて、ヤルマールがテーブルの上を見ると、そこには、小さな紙の家が立っていて、どの窓にも明りがついていました。

そして、家の前には、すずの兵隊さんが、みんな、ささげつつ 捧 銃 をし  
ていました。花嫁と花婿は、床ゆかにすわって、テーブルの足により  
かかり、なにか物思いにふけていました。もちろん、それには、  
それだけのわけがあつたのです。オーレ・ルゲイエは、おばあさ  
んの黒いスカートをつけて、坊ぼうさんのかわりに、式を行いました。  
式がすむと、部屋じゅうの家具という家具が、みんなで声をそろ  
えて、鉛筆えんぴつの作った、美しい歌をうたいました。その歌は、兵  
隊さんが兵舎に帰るときのラツパの節ふしでした。

歌えや、歌え！ この喜び、

われら歌わん、ふたりのために！

見よや、見よ！　顔こわばらせ、楽しげに、

中に立つは、われらの革人形かわ！

ばんざい！　ばんざい！　革人形！

われら歌わん、声高らかに！

それから、ふたりは贈り物をもらいました。しかし、食べ物は、みんなことわりました。だって、ふたりは愛情だけで、もういっぱいだったのですから。

「ところで、ぼくたちは、いなかに住むことにしようか、それとも、外国へでも旅行しようか？」と、花婿がたずねました。そして、たくさん旅行をしているツバメと、五度もひなをかえしたこ

とのある、年よりのメンドリに相談してみました。すると、ツバメは、美しい、暖かい国のことを話しました。そこには、大きなブドウの房が、おもたそうにたれさがつていて、気候はじつにおだやかで、山々は、ここではとうてい見られないような、すばらしい色をしていると。

「でも、そこには、わたしたちのところにあるような、青キヤベツはないでしょう」と、メンドリが言いました。「わたしは、子供たちといっしょに、いなかで、一夏をすごしたことがあるんですがね。そこには、砂利取り場があつて、わたしたちは、その中を歩きまわつて、土をかきまわしたものですよ。それから、青キヤベツの畑にはいることも、ゆるしてもらいましたよ。ああ、ほ

んとに青々としていましたっけ。あそこよりいいところなんて、わたしにはとても考えられませんわ！」

「だけど、キャベツなんて、どこのだっておんなじですよ」と、ツバメは言いました。「それに、ここは、ときどき、とてもひどい天気になるじゃありませんか！」

「そうですね、でもそんなことには、みんな、なれてしまってますよ」と、メンドリは言いました。

「でも、ここは寒くって、氷もはりますよ！」

「そのほうが、キャベツにはいいんですよ」と、メンドリは言いました。「それに、ここも暖かになることだってありますわ。四年前のことですがね、夏が五週間もつづいたんですよ。あのとき

は、暑くて暑くて、それこそ、息をするのもやつとでしたわ！

それからここには、暑い国にいるような、毒をもった動物がいま  
せんよ。どろぼうの心配ありません。この国をどこよりも美し  
い国だと思わないような人は、わるい人です！ そんな人は、こ  
の国にいる、ねうちがありません！」こう言うと、メンドリは泣  
きだしました。「わたしだつて、旅行をしたことはありませんよ。  
かごにはいつて、十二マイル以上も旅をしてきたんですからね。  
でも旅行なんて、ちつとも楽しいものじゃありませんわ！」

「そうだわ。ニワトリの奥おくさんのおつしやるとおりよ」と、人形  
のベルタは言いました。「あたし、山の旅行なんていやだわ！  
だつて、登ったり、下りおりたりするだけなんですもの。ねえ、あた

したちも、砂利取り場の近くへ行きましようよ。そうして、キャベツ畑を散歩しましうね」

そして、そのとおりになりました。

## 土曜日

「さあ、お話してね」ヤルマールは、オーレ・ルゲイエに寢床へ連れていってもらうと、すぐに、こう言いました。

「今夜は、お話しているひまがないんだよ」オーレはこう言つて、見るも美しいこうもりがさを、ヤルマールの上にひろげました。

「まあ、この中国人をごらん」

見ると、こうもりがさは、全体が大きな中国のお皿せらのようで、それには青い木々や、とがった橋の絵が、かいてありました。その橋の上に、小さな中国人が立っていて、こちらにむかつてうなずいていました。

「わたしたちは、あしたの朝までに、世界じゅうをきれいにしておかなければならないんだよ」と、オーレは言いました。「あしたは日曜日で、神聖な日だからね。わたしは、これから教会の塔とうへ行って、教会のこびとの妖精ようせいが鐘かねをみがいて、いい音がでるようにしておいたかどうかを見なければならぬし、畑へも行って、風が草や木の葉から、ほこりを吹きふはらつてくれたかどうかも見なければならぬんだよ。でも、いちばん大事な仕事は、空

の星をみんな下ろして、みかくことだよ。わたしは、それを前掛まえかけに入れて、持ってくるんだがね、その前に、一つ一つの星に、番号をつけておかなければならないのさ。そして、取り出したあとの穴にも、同じ番号をつけなければならないんだよ。星が帰ってきたときに、ちゃんと、もとの場所へもどれるようにね。もしちがった穴へでもはいつてしまうと、ちゃんとすわっていられないから、あとからあとからころがり落ちて、流れ星があんまりたぐさんできてしまうからね」

「もしもし、ルゲイエさん！」と、そのとき、ヤルマールの寝ねている、上のかべにかかっている、古い肖像画しょうぞうがが言いました。

「わしはヤルマールの曾祖父そうそふです。子供にいろいろ話を聞かせて

くださつて、あつくお礼を申します。しかし、子供の考えを迷わさないように願いますぞ。空の星は、取り下ろしたり、みがいたりできるものではありませんからな。星というものは、われわれの地球と同じく、天体なのですぞ。そしてまた、それがいいところなんですからな」

「ありがとうございます、お年よりのひいおじいさま！」と、オーレ・ルゲイエは言いました。「ありがとうございます！ あなたは、一家のお頭かしらです。あなたは『古い』お頭です。しかし、わたしは、あなたよりももっと古いのです。わたしは、むかしの異教徒なのです。ローマ人やギリシヤ人は、わたしのことを、『眠ねむりの精』と呼んだものですよ。わたしは、いちばんとうとい家の中へもはいつていきまし

たし、今でもはいつていきます。わたしは、小さい人とも大きい人とも、おつきあいができるのです！ それでは、今夜は、あなたと話をしてやってください！——

こう言うと、オーレ・ルゲイエは、こうもりがさを持って、行ってしまいました。

「今では、自分の考えを言うこともできんのか！」と、古い肖像画が言いました。

そのときヤルマールは目がさめました。

## 日曜日

「今晚は！」と、オーレ・ルゲイエは言いました。すると、ヤルマールはうなずきました。けれども、すぐさまとんで行つて、ひいおじいさんの肖像画を、かべのほうへ向けてしまいました。こうしておかないと、またゆうべのように、口を出されて、お話が聞けなくなつてしまいますからね。

「さあ、お話を聞かせて。『一つのさやに住んでいる、五つぶの青いエンドウマメの話』や、『メンドリの足に愛をささやいた、オンドリの足の話』や、『あんまり細いので、ぬい針はりだとうぬぼれている、かがり針の話』なんかをね」

「お話のほかにも、ためになることはたくさんあるよ」と、オーレ・ルゲイエは言いました。「ところで、今夜は、ぜひともおま

えに見せたいものがあるんだよ。わたしの弟なんだがね、名前は、やっぱりオーレ・ルゲイエだよ。もつとも、弟は、どんな人のところへも、一度しかこないがね。くれば、すぐに、その人をウマに乗せて、お話を聞かせてやる。ところが、そのお話というのは、二つつきり。一つは、だれも思いおよばないような、すばらしく美しいお話、もう一つは、ぞつとするような、<sup>おそ</sup>恐ろしい、——とても書くことができないような、お話なんだよ」

そこで、オーレ・ルゲイエは、小さなヤルマールを窓のところへだき上げて、言いました。「ほら、あそこに見えるのが、わたしの弟で、もうひとりのオーレ・ルゲイエだよ。人間は、弟のことを、死神とも言っている。だけど、ごらん。絵本だと、<sup>がいこつ</sup>骸骨

ばかりの、恐ろしい姿にかかっているけれども、そんなふうじゃないね。それどころか、銀のししゅうをした、上着を着ている。まるで、美しい軽騎兵けいきへいの軍服のようじゃないか！ 黒いビロードのマントが、ウマの上でひらひら、ひるがえっている！ あれあれ、あんなに速くウマを走らせているよ！」

言われて、ヤルマールがながめると、そのオーレ・ルゲイエがウマを走らせていました。そして、若い者や、年とつた者を、ウマに乗せていました。ある者は前に、また、ある者はうしろに乗せました。けれども乗せる前に、オーレ・ルゲイエは、いつもこうたずねました。

「成績表はどんなだね？」

「いい成績です」と、だれもかれもが、言いました。

「よろしい、ちよつと見せたまえ」と、オーレ・ルゲイエは言いました。

そこで、みんなは、成績表を見せなければなりません。その結果、「秀<sup>しゅう</sup>」と「優」とをもらっていた者は、ウマの前のほうに乗って、楽しいお話を聞かせてもらいます。ところが、「良」と

「可」とをもらっていた者は、ウマのうしろのほうにすわって、ぞつとするようなお話を聞かなければならないのです。その人たちは、ふるえながら、泣いていました。ウマからとび下りようとしても、だめなのです。なぜって、みんなはウマに乗せられたとたん、たちまち、根が生<sup>は</sup>えたように、動けなくなってしまうから

です。

「だけど、死神って、とつてもりっぱなオーレ・ルゲイエだねえ！」と、ヤルマールは言いました。「ぼく、ちつともこわくないよ」

「そう、こわがることなんかないね」と、オーレ・ルゲイエは言いました。「いい成績表を、もらえるようにしさえすればいいんだよ」

「さよう、これはためになる！」と、ひいおじいさんの肖像画が、つぶやきました。「やっぱり、自分の考えを言えば、役にたつんじゃない！」こう言つて、肖像画は満足しました。

みなさん！　これが眠りねむの精のオーレ・ルゲイエのお話です。

今夜は、オーレ・ルゲイエが、みなさんに、もつといろいろのお話をしてくれるかもしれませんよ！



# 青空文庫情報

底本：「人魚の姫 アンデルセン童話集※」[#ローマ数字]、I-I  
3-21]」新潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年12月10日発行

1989（平成元）年11月15日34刷改版

2011（平成23）年9月5日48刷

※表題は底本では、「眠《ねむ》りの精」となっています。

入力：チエコ

校正：木下聡

2019年7月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 眠りの精

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>